大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第三十八卷　第六號

昭和九年六月一日發行

論叢

不動産の登録税に就きて……法學博士　神戸正雄

新勞銀基金説について……文學博士　高田保馬

時論

現今の思想問題……經濟學博士　作田莊一

滿洲問題と國民主義……經濟學博士　石川興二

研究

生産增加と貨幣需要……經濟學士　中谷實

北海道鰊定置漁業に於ける漁場動員……經濟學士　岡本清造

景氣觀測について……經濟學士　祭原光太郎

説苑

定航海傭船契約に於ける特約條項……經濟學士　佐波宣平

百貨店出張販賣の本質……經濟學士　堀新一

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

本誌第三十八卷總目錄

（禁轉載）

第三十八卷　一一一八　第六號　四二

時論

現代の思想問題

作田莊一

一

思想は行動を導き、行動は思想を打建てる。確かな海圖を見て舵を取るとき、船が目的地へと進んで行く。船が航路の一角を廻れば、更にその位置に立つて舵を取り直ほす。只だの推進機は何ものでも持つてゐる。目的を意識し志向し、舵を取つて進むことが人間の特質である。思はず知らず衝動のまゝに生きてゐた人類が思ひ知りつゝ行ひ爲すに及んで、始めて人類が人間となり變遷史が經歴史に移つた。それは罪を犯すべく禁斷の木の實を食つたのではなく、天照らす光が岩戸の隙間から耀き始めたのである。知るは憂世の初めでもあらうが、憂世から解脱することもまた覺り知るからである。思つては行ひ行つては思ひ、知つては爲し爲しては知り、これが限りなく進展して行く所に人生の意義がある。行ふことは生きることであると言ふほどに行はなければ詮なきことであるが、また思ふことが人間にとつて如何に生き甲斐あるかを思へ。思ひ煩ふと

き百たび思ふも一たび行ふに若かずと思切りながらも、また千たび行ふとも思はざるの甚しきを如何にせんと思ひ返へすのである。一方では汝の思ひ計ることを悉く斷ち切れと戒めながらも、他方では唯だ我等の爲に本願を立てたもふ如來を念へと勸める。祖先の魂を念ふものを嘲笑する人々でも、形而下の祖先たる物質を念はずには居られない。最初の發言はどう思ふかと尋ね、最後の宣告は思ひ知つたかと言渡す。何處まで往つても、數々ぐるぐる廻りをしてきへも、思はないでは居らないほど思ひ知らうとすることが人の人たる持前であつて、人とは思ふ者なりと言ふ定義も許される。

思はず知らずに生きてゐる動物でさへも、長い年月を經る間には代を重ねるに從つて種族的に高い階段へと變化して行くが、更に人間はそれと質を異にし、思つて行ふ所に創造・開化の跡が現示される。動物以下には進化が見られるが、人間には造化が見られる。この造化を見落とすとき、人間觀が人類觀に墮落する。たとへ如何ほど僅かな造化の行程であらうとも、我等が一歩でも先きに進めば進むほど、それだけ進んだ現實境に立つことゝなり、その境地からは曾て見えなかつた前途が見えて來る。そこに立つて我等は返へり見て現實境を觀照し、更に前途を向ひ見て實踐の企圖に就て考へる。行つた跡を思ひ、思ひ定めてまた行ふ。この思ひ行ふことは單に繰返へして循環するのではなく、渦卷いて開展して往く。そこに人生の無限の進歩がある。

二

斯の如く人は思ひ知りつゝ行ひ爲すと言ふことは殆ど自明のことであるとしても、それだけでは尙ほ思想問題は開展しない。思ひ且つ行ふ人とは抑も如何なる人であるか。人が如何なる形相に於て思ひ行ふのであるか。言ふまでもなく人は人中にて生活する。人は必ず常に多くの人々の間に一所に住んで生活する人間であるが、最初の間は一所に生活してゐると言ふ自覺が漠然としてゐる。やがて個々の生活に自覺が生ずるとき、また一同に生活してゐると言ふ自覺も生じて來る。人は各個人であると同時に世間人であり、各々自ら思ひ行ふと同時に皆諸共に思ひ行ふのである。人の人たる所以は、思ひ行ふことであり、また相結んで共に生きることであり、更にまた相結んで共に思ひ行ふことにある。この人間生活に就て、行ふことには一々の個人が行ふ場合の外に團體が一同に行ふ場合もあると言ふことは、誰も疑問とするものはない。然るに思ふことには一々の個人が思ふ場合の外に團體が一同に思ふ場合もあると言ふ點に就ては、或は疑を挿むものが少くあるまい。一同が行ふ場合にも、未熟の團體教練に於て、中に左向く馬鹿もあると言ふ唄の文句のやうな不統一も見られるから、一同が思ふ場合にも右向き左向き樣々の思想が混ることも有り勝ちである。しかし秩序整然たる一隊の行進が見られるやうに、四十七人の意識と志向とが一絲亂れず統一されてゐることもある。一々の個人が行ふ性質のものでは、酒好き餅好きが自由行動をとるに何の奇妙もなく、また一同で行ふ性質のものに、事實に於て統一のとれないもの

があることもさして珍しいことではない。思ふ場合は行ふ場合ほど明かに見別け難く、また一は他ほどに統制がとれないが、一々の個人が思ふ外に、多數人が一同に思ひながら統一がとれなかつたり或は善くとれたりする場合のあることは、行ふ場合と異る所はない。若しも團體は一同に行ふだけで一同に思ふことがないものであるならば、たとへ個人は思ふから人の人たる資格を具へ居るとしても、團體は思はず知らず衝動的に生きる動物の生活に止まるであらう。しかし一々の個人は人であつても、團結すれば動物となると言ふことは承認し難い。實は團體もまた思ふのである。會社や組合や同盟や、格違ひではあるが國家もまた、皆評議し計畫し思慮を巡らしてゐる。討論が如何に沸騰しても終には統一されて同一の結論に到達する、また到達しなければならぬ。評議が終に纏らないこともあるが、個人にも思ひ亂れて決まりが付かないこともある。

團體も個人の如く思慮し、分立せる意見はいつかは歸一する。然るに社會となれば、人々が相交り寄合つて集團を成すまでには立到つてゐるが、團體のやうに意志を具へてゐないから、それには意識も志向もない。社會を成せる多數の個人が何を思つても、それは社會が思ふことゝはならないで、社會は唯だ思はず知らずに動いてゐる。社會の語が何を意味するかに就ては種々の見解もあるが、吾人は人々が人格を擧げて相互的に結び合つてゐる一境域の關聯態を指して社會と謂ふ。かゝる社會には自覺なく意志なく、社會は思慮しないと言ふことに就ては異論がない。恐慌や失業が思慮から生じたとは言へない。しかし社會が自動する存在なるか否かに就ては疑問を

挿む人々が少くあるまいが、社會に現れる種々の事態が個人の活動の仕方からは到底理解が出來ない所を見ると、否應なしに社會の自動作用を認めない譯には行かぬ。煉瓦を積上げて或高さに達するとき横樣に倒れるが、その理由は一々の煉瓦の性質を調べたのでは解らない。一々の煉瓦の重心よりも別に積重ねた煉瓦の重心がある。均等の性質を持つ煉瓦でさへも然うである。樣々の性質を持つ個人が結合つた社會では、個人の側からは理解の出來ない事件が起つて來る。社會はかく自動するが、しかし思ふことなく機能的に動く。それは重力の法則にも比べられようが、寧ろ衝動力の作用に比べる方が人間社會らしくてよい。かくて個人は思ひ行つても、社會の出來事によつて自己の思ふやうに行はれない。思はざる成功を惠まれることもあるが、思はざる失敗に惱まされる。そこで人々はかゝる超個人的勢力を振ふ社會に就て考へ始める。個人が個人の事を思ふのは個人の問題であつて社會の問題とはならない。人々が個人を超えて社會が何であるか如何に動くかを思ひ、社會がどうならば人々の生活が思ふやうに營まれ得るかに就て、社會が動き又は動かうとする方向に沿ふて考へるときは、それは一個人に限られた思想ではなく社會人としての思想となり、更に或社會人の思想と他の社會人の思想との間に交渉を生じて來る。

社會に於て社會人の生活に大なる不平等がないか或は不平等があつても低位の人々にとつて向上發展の餘地が存するときには、社會生活は安定して大體に一筋の方向をとつて進んで行く。その時代には社會人の思想も概して同じ方向に沿ふて進展し、際立つた意見の對立は生じない。然

るに社會に於て社會人の生活が不平等となり且つ低位の人々の生活の向上の途が阻止され行詰つて來ると、そこには著しく方向を異にする社會人の思想の潮流が分立して來る。この思潮分流を生ずるに當つては、必ずそれらが據つて立つ所の基礎に分裂を生じてゐるのである。その基礎と言ふは人々の社會的意識である。社會的意識と言ふは、人々が社會生活を營むに就ての自覺であり、特に社會の如何なる地位に於て生活を營み居るかに就ての社會人としての自覺である。勿論社會には自覺がないが、社會人には自覺を生ずる。而かもこの自覺が大多數の人々の間に起り且つ次第に增進して來たと言ふことは、文藝復興期の我の自覺よりも遙かに進み出でたもので、實に近代に於ける社會の發展と共に過ぐる二世紀の間に現はれたる史上未曾有の出來事であつた。かゝる自覺の發生及び增進は、概して人間の自覺性が社會生活の緊密を加へるにつれ且つまた社會人の生活が不均等となるに從つて刺激されて來たからである。この點は一層廣く深く討究しなければならないが、ともかく社會人の意識が現代に近づくに從つて次第に增進せることは疑ない。人々はその社會的意識から社會生活を觀察し思索する。而して社會人は集團人であり全體人でないから、彼等は同じ境涯に居る仲間の生活にとつて好都合な生活要求を懷いて社會をその方向に動かさうとする。しかし社會は國家と異り無自覺的に自動し、人々の要求に耳を傾けない。かくて要求の聲は社會には向けられないで、異れる要求を持つ二以上の群集の間に互に差向けられて喧嘩口論となり、更に各群の勢力を增大しようとして社會的意識の弱いもの又は未だ意見を確立し

ないものに向つて聲高く呼びかける。最近に至つて社會生活の不平等性卽ち社會階級の對立が益々甚しくなるにつれて、かゝる論爭と宣傳とは愈々烈しくなつて來た。しかもまた思ふことは行ふことであるから、行動による世態の變化も豫想される。新世態を怖れるもの又は期待するものは益々社會生活思想に深い關心を持ち、論爭や宣傳は愈々眞劍味を帶びて來た。現代の思想問題は、決して少數の學究が研究室や講堂に陳列する問題ではない。否な書齋より街頭へなど言ふやうな呑氣な住所別はいつしか打破られて、社會に呼吸する學究はいつも渦卷く世間の怒濤の中に立つてゐる。今や社會生活思想は概念敎徒と袂を別ち、その日を豐かに暮す人々にも明日の糧を心配する人々にも一樣に深く喰入つて、思想問題は正さに實生活の問題となつてゐる。

團體であれば、人々の間に意見の相違があつても、それらを統一して一定の決議に運び行く組織がある。各自の主張が意識的であると同時に、それらを取纏める決議もまた意識的である。そこには意見の對立があつても、對立そのことが獨立して問題となることはない。然るに社會は無自覺的存在であるから、對立意見を意識的に統一することが出來ない。唯だ一方の意見が他方の意見を力によつて克服するとき、自然の解決が見られるのみである。然らば我等の世間生活は常に必ずかゝる思想紛爭の情勢の中に住んで、力づくの自然の勝負を待つ外はないであらうか。或人々は、世間に種々の異つた思想が並び存することが生活進步の爲に望ましく、一本調子の思想が支配することは生活の停頓であり退步とさへなるであらうと言ふ。しかし統一のない雜多に止

まることは人の人たる所以の意志生活とはならない。同系・正統から異端・反抗を生じ、異端が多端に亘り多端が紛亂に陷つても、やがてはまた新しい同系・正統に到達する所に意志生活の本領が存する。色々の變り種も面白い。しかし面白いと感ずるのは尙ほ何處かに統一がとれてゐる間である。統一は多樣を容れるが、雜多は生の分裂である。多數決の方法でも、多數の意見には服從すると言ふ全員一致の約束が基礎となつてゐる。團體でない社會にはかゝる基礎もない。無自覺の社會は幾多の我執の思想をして鬪はしめる。我等が社會に住むだけであるならば、思想問題は常に紛糾を繰返へす外はない。

三

我等が相互依賴の關聯態たる社會に住む限りは、思想問題は唯だ一方が他方を力づくにて押へ付ける外には解決の途はない。この時、盲目的な社會の上に立つて何かの意識的な解決を計る力があるならば、思想の力づくの爭鬪が必しも避け難いとは限らず、明るい正しい解決が試み得られるであらう。然らば然う言ふ力が果して實在するか。然り、それは共同的全體としての國家の力である。社會も國家も俱に總ての個人を包容しながら且つ超越する所の總體的實在であるが、一は相互的關聯に止まるから意志力を持たず、他は共同的結束であるから意志力を成立せしめる。從來の世間科學は概ね社會を意識的に統制する所の共同的全體—それを吾人は國家と名づける—の實在を承認しないが、これを認めないでは思想問題にはいつまでも光明を認め得ない。國家の

意志力さへ健在であるならば、社會に於て如何に對立意見の鬪爭が烈しからうとも、その意志力を以て採決に當り、思想生活を全く混亂に陷れるやうな結果を防ぎ止め得るであらう。然るに最近代の多くの國家は、社會に於ける對立鬪爭の渦中に捲き込まれて、次第に統制力を消磨され本來の威力を失墜してゐる。この點はまた思想問題を一層激越ならしめた一の大きな原因である。しかしながら國家はいつまでも迷惑を蒙つて、時の强大なる社會的勢力に左袒してゐるものではない。勢が窮らうとする時、國家はその固有の地位を反省し始めた。

今日、日本・イタリー・ドイツー或方向から見ればロシヤもまた一等の國家は、社會の思想紛爭の中に立つて國家としての立場から一定の思想を世間に提出し宣傳しつゝある。この時國家は思想善導を行ふと言はれるも、一層適切な見方は、國家が思想鬪爭をなせる社會に面して國家自らの思想を主張してゐると言ふべきであらう。是に於てか思想問題は更に一層複雜となつて來た。このとき國家人は別として、社會生活に重點を置く社會人は、國家が指令する思想に對し、或は憤慨し或は嗟嘆し或は冷嘲し或は恐怖する。これに對し國家が權力を用ゐて思想統制を嚴しくするならば、表面では思想の紛亂を鎭定することが出來るが、その對象が對象だけに人々を得心せしめるやうに問題を解決したことゝはならない。ロシヤの如きは十數年に亘り極端なる思想統制を行つてゐるが、不思議なことにはロシヤには統制の基準となるべき思想が何であるか不明である。革命實踐に於てマルクスを克服したるレーニンその他の人々には、批判思想は豐かであるが、積

極的な建設的な思想體系が見當らない。マルクス・エンゲルスより多くを出でない唯物辯證法論や半國家說の再生產では、權力掌握以後に於ける共產主義の大成は思ひもよらぬ。それでもロシヤの思想界が沈默を守つてゐるのは主として思想警察の力によるのであらう。思想問題の徹底的解決は、表面的に權力を用ゐて思想統制を行ふことではなく、紛亂に陷れる思想問題の由つて來れる根抵に立入り、國家生活並に社會生活を立直ほすことの出來るやうな指導的思想をば、國家人によつて新たに打建て發展させることでなければならぬ。世人の中には、思想問題が餘りにも深刻なる實生活に根ざしてゐることを察して、思想對策を講ずるよりも寧ろ險惡なる破壞思想を發生せしめたる社會そのものゝ改造を斷行することが先決問題であると唱へるものも少くない。それも一應尤ものやうであるが、實は考へ方が逆になつてゐる。西洋では已に歷史研究の好題目となつてゐるやうな平凡な社會政策でさへも、今日まで我國では中々行はれない。それほど近時の我が國家意志は衰弱し指導思想は涸渴してゐる。ましてや社會の改造と言ふやうな大業を行ふに當つて果して如何なる改造方針が確立されてゐるだらうか。共產黨のやうに、唯だ暴力を以て權力を掌握しさへすれば、後はまた後の思案があると考へるロシヤ式の改造はロシヤなればこそ出現したのであらう。改造に當つて何が改造の必要を生ぜしめたか、何を目標として方針として改造を計るべきかに就ては、根幹となるべき指導思想が確立してゐなければならぬ。實はこの思想が缺乏してゐると言ふことが、單に改造の實行を停頓せしめると言ふだけではなく、また社會

的思想の紛爭混亂を招いた所以である。そこに思想問題の本質的なるものがある。從つて吾人は進んでこの本質的なるものを突き止めて見なければならぬ。

四

然らば現代の思想問題は何を問題となし如何に問題となされたのであるか。問題は一二に止まらないが、思想を問題とする人々にとつて最大の關心を持たしめる主題は實は國民生活の問題である。勿論最初から國民生活が問題となつたのではなく、初めは階級問題が思想紛爭の渦紋を捲き起こした。階級は古からあつたが、それが思想問題となつたのは近く數十年以來の出來事であり、それは階級自覺の產果である。自覺の力は實に驚くべきものであり、無自覺在と自覺在とは存在の意義を異にし、一より他への質的變化は生の世界を異らしめる。階級自覺によつて或は階級を頑守し或は階級を解消せしめようとする活動が初めて發生する。自覺に基く强大なる思想の力は實に力の思想であり、その思想を懷く力は單に實在する力ではなく、實に自覺せる力であり、意識的に對立する階級鬪爭はその自覺力の鬪爭である。人類の歷史は階級鬪爭の歷史と謂はれるが、この階級史觀を獲得したことが階級自覺の賜である如く、階級自覺前後に於ける階級鬪爭の相違は、恰も意志未熟期の子供の擊合と意志成熟以後の大人の作戰との相違にも比すべき質の相違である。

階級思想は力の思想であり、强い力の思想は思想の力としても强い。かくしてこの思想が廣ま

り行くに從つて最も大なる壓迫を蒙つたものは、この思想の發生以前に存したる自由主義思想と國民主義思想とであつた。自由主義はもと社會生活、特に社會經濟の充實を要する時代に召出されたものであるから、社會經濟が成熟し果ては階級對抗にまで爛熟して階級主義思想が出現せる時代に到れば、已にその任期を終へて否應なしに退場しなければならぬ。しかし國民主義思想はそんな一時代の暫有思想ではない。國民生活は多くは數千年の長い古代期を經て後に、社會を迎へ收めて近代期に入つた。然るにこの社會の發展は近代的階級を生み、更に階級自覺を生じて意識的階級鬪爭を見るに及んで國民生活は著しく弛緩し始めた。國民生活を支持するものは國家であるが、その國家の威力が社會の增長につれて減退し、古代の民族國家の後に加つた市民國家層が著しく共同體の結束を緩め、更に階級自立の力は國家を腐蝕し或は破壞しようとするに至つて國民生活は甚しく安定を缺くに至つた。階級鬪爭が思想的に將た行動的に熾烈であると言ふだけでは、問題は今のやうに危篤狀態にはならない。階級鬪爭に熱注する階級人は、鬪爭をこそ大事と思へ、思想問題として特に惱む所はない。階級思想及びこれが導く行動によつて不安の狀態に置かれたものは國民である。國民生活は一方では階級間の鬪爭によつて國民團體の分裂を來さうとし、他方では陰に陽に各階級から來る壓迫によつて甚しく存立を脅かされて來た。この點が實に思想問題の重點となつてゐる。蓋し人々は幾千年の間、國民生活を營み續けて今日に至り、人間としての存在は社會的歷史的實在など言ふやうな概念的表示では間に合はず、人間の歷史は國

民の歴史とまで思つてゐる所に、その國民生活が內面的に危險に曝されると言ふことは、どう思つてもこれほどの大事はあるまいと思はれるからである。

斯の如く國民生活は國家の威力の減退と共に內部に在る社會の側から脅かされて來たが、更に今一つは同樣の脅迫が外部の社會からも襲つて來た。抑も社會生活は個人生活の關聯に過ぎないから、これに對する國家の統制が嚴しい間は、社會は國民團體の中に安住してゐるが、その統制が弛緩するときは國境は次第に取崩されて個人は世界を範圍として生活關聯を結んで行く。社會生活に卽して見れば、國民生活と言ふも要するに個人生活の關聯が地方的に格段に周密なる結集狀態を呈してゐるに過ぎないと見られる。そこでは國民生活の獨自の存在し歴史的・文化的將た生活力的なる存在ーが認められないで、萬民生活へ擴がり行く可能性を持つてゐる。

社會生活はもと古代から近代にかけて國民生活の中に發展したものであるが、その生活の本質は相互交通生活であり、その中味は個人の自主自由の生活であるから、社會人はこの自主自由の立場を根抵として一國民の社會と他國民の社會とを連絡せしめる。多くの國民が接觸し交通するに及んでは、その生活の一面は世界萬民へと擴大されて來た。この推移を實質的に運んだものは世界大戰前までに急速に發展したる世界經濟交通であり、その交通の中に巢立つた所の階級的社會人の萬民的連結であつた。それは主流に於ては祖國を持たぬ資本家によつて、反動的には祖國を呪ふ勞働者によつて。かくて大戰直前の世界經濟に面したとき、それらの人々は、國民生活が

重心を失つて萬民生活の中に流れ込んで了ふ時機もさまで遠くはあるまいと豫想した。この點に於てもまた國民生活は空前の危機に臨んでゐたと言へる。かゝる情勢の間に世界大戰が勃發した。大戰後の世界の情勢は勝つた國も負けた國も中立の國も新たに建てられた國も擧げて國民生活の安全保障に努力することであつた。大戰に臨んで押へられた階級鬪爭は、大戰後の混亂に乘じて時こそ來れと猛然と起ち上つたが、これも國民生活の保全の前には宿望を遂げる餘地がなかつた。特殊の情勢の下に無產階級の勝利を獲得したロシヤに於てさへ、萬民的革命の理論とは方向を異にせる國民生活へ轉向した。

世界大戰は諸國民に對し自體存在の再認識を强要した。イタリーのファシズムやドイツのナチスは言ふまでもない。イギリスは世界に唯一なる政黨對立の政治を中止し且つ外國に對し甚しい排外自衛の手段をとるに至つた。フランスは度々擧國一致の政策を以て難關を切拔けた。資本家の天國と謳はれたアメリカに於てさへも、ルーズヴェルト政策の奧には曾て考へられなかつた變革の企圖が潛んでゐると批評されるほどに、國民經濟の立直ほしが行はれつゝある。無產勞働者の天國に變つたと自賛してゐるロシヤに於てさへも、新國民經濟の建設の爲めには、數萬人の餓死や幾千萬人の苦役を物ともせず、鋼鐵のやうな意志を以て豫定計畫の實現に猛進してゐる。無產者の天國に無產者の生地獄が出現したと批評されるが、マルクスの教說に背いて早產の計畫經濟を迎へたロシヤにあつては、この生地獄は實に國民經濟の更生の爲に免れ難い犧牲であらう。

斯の如く大戰後の諸國は概して國民生活の安全を確保することに細心の注意を持つと同時に、更に進んで國民文化の保持・進展に大なる關心を懷いてゐる。世界の何處を見ても國民主義の思想が隆起しつゝある。十九世紀を世界生活への發展時代であるとすれば、二十世紀は國民生活の更新時代であらう。多くの國では尙ほ階級對立を續けてゐるから、强烈なる階級思想抗爭を內部に含んで、その上に國民主義が立つてゐる。國民主義は左右兩翼に對向し、資本に操られて世界狹しと驅け廻る非國民人を制しなければならぬ。またそれは鐵鎖の外に失ふものなしと唱へる通りに財產もないが國民性格をも置き忘れた反國民人を抑へなければならぬ。これに加ふるにこの主義は國家の恩に狎れて國家を輕んじ國民性格を消磨せる末期の自由主義者をも一蹴しなければならぬ。凡そ斯の如きは國民主義が執る所の總攻擊の態度である。但しその國民主義にも純眞なるものあり不純なるものあり、また純眞ならんとしても主義の確立實現に臨んで妥協を强いられ、旗幟に斑點を印するものも少くない。されどそれは時の經過によつて淸算される外はあるまい。また時と共に純眞なるものと不純なるものとが簡別され行くであらう。

社會的思想が紛糾せる間に新たに國民主義の思想が勃興し、思想問題は一層複雜となつた。唯だロシヤだけは階級對立を打破し、支配階級が國民的共產主義を打建て、强權を以て反對思想を抑壓してゐるから、この國だけは思想問題が表面に現はれない。こゝでは思想問題は警察問題となつてゐる。然るに他の諸國にあつては、國家の態度が或は舊の如く有產階級に與みし或は階級

協調の新政策に進出したが、階級對立は依然として解けない。階級的思想の對立は大戰前又は直後のやうに烈しくはないが、裏や底を流れる思想は決して衰へてゐない。階級思想が裏へ廻つたと言ふことは、新しく國民主義の思想が復活して、それらを抑へて來たからである。イタリーやドイツの如きは已に政府自ら思想宣傳の局に當り、國家生活—特に民族國家生活—に反する思想の抑制に力を用ゐてゐる。

五

思想問題は諸國を通じて見れば大體上述の通りであるが、我國に於ては更に他國に見られない特殊の問題が加つてゐる。それは言ふまでもなく國體問題である。國體卽ち國家の基本體制は國によつて異るが、大別すれば實中心の國體と虛中心の國體とに分たれる。國家の本質は共同的全體の組織である。この見解に反する學說は多々あり、殊にマルキシズムでは最も强くこれを否定するが、それさへロシヤの革命によつて實踐的に自說を淸算してゐる。國家が共同的全體である以上は、聯關聯珠の社會と異り、それには如何なる體制に於てか必ず中心卽ち全體意志が存しなければならぬ。然るにかゝる中心の總持者には、國家の歷史を通じて實體的に一定不易なるものと一定の所在なく時代の情勢によつて轉々移動するものとがある。日本の國體は實中心の國體である。卽ち共同的全體の中心たる全體意志が國民の宗家に於て實體的に一貫して總持され來り且つ總持されて行くのである。古代の我が國民の中には、儒敎を迎へ佛敎を迎へて國體に疑惑を感

じたものもあつたが、或るものは國體守護者の威勢の下に慴服し、或るものは幾度も論證し實證して後に終に自證に立歸つてその疑惑を解いた。近代の我が國民の中にも、新しく西洋の思想を受納れてまたもや國體に就て疑惑を感じ、殊に近代西洋思想は多くは社會的思想であり且つ我國にも近代社會の發展を見るに至つたので、國體に對する疑惑は廣く且つ深く懷かれるやうになつた。この時謂ゆる思想國難の問題が起つた。これは他の國民には見られない特殊のものである。この國體思想が受ける試練は外國思想から影響を受けるものとしては最後のものであり、しかもこの難關と雖もやがて無事に通過するであらうことは疑ないが、そこに達するまでの國體守護者の努力は徹底的に推し進められるであらう。他の思想は、自由主義でも無政府主義でもブルジョア主義でもプロレタリア主義でも凡て自己を主とするから、死ぬると言ふことは已むを得ない場合にのみ考へられる。然るに國民主義、特に國家意志の實體的總持者を守護する日本の國民主義思想は沒自己の立場に居るから、初一念の中に死を計上してゐる。その反擊力・推進力の强勢なることは當然である。種々の社會的思想は互に他を克服しようとして相鬪いでゐるが、その上に出でたる國民主義は、國民團體を支持する國家を輕蔑し冷笑する自由主義及び無政府主義とこれに面從腹背の態度をとる有產階級主義とこれを批難攻擊する無產階級主義との諸方面に對して徹底的に反擊を加へつゝある。超階級的のものはあり得ないと言ふものもあるが、現に我國では超階級的思想が廣く國民の間に—而かも無產階級の間に—支持されてゐる現實を無視することは出

來ない。眞理は概念の中にはなく、現實の中にある。

多くの國に於ては國民主義が已に支配的となり或はならうとしてゐるが、その國民主義の中には階級協調に止まるか階級解消に乘出すかの對立があり、また政體に於て獨裁制をとるか衆決制をとるかの對立もあり、而かもこれらの對立を超越する實在的意志力が具體的に表現されてゐないから、國民主義の重心が動搖し勝である。從つて國民主義が純なる內容を具へて兩階級に呼びかけると言ふことも殆ど現實に於ては望み難く、不純なる國民主義は相當の時の經過によつて淨化される外はない。然るに實體的中心を有する我國に於てはその點は明瞭になつてゐる。獨裁制か衆決制か、階級協調か階級解消か、またこれらを時勢に卽して如何に處置するか、かゝる問題は一に我が國民團體の基本體制に據つて決定せられる。しかしこの明瞭な問題と雖も國民主義に立つて見るから明瞭なのであつて、この主義以外の思想ではこれらの問題を最高の問題となして互に鬪爭に日を送つてゐる。近頃輕卒に考へる人々は、我國の思想及びこれに基く行動を簡單に右翼左翼に別ち、例へば國民團體の實體的中心に卽して階級解消を企圖する思想方向をも右翼の中に加へてゐる。これは我が國の思想の流れを知らないものである。右翼左翼の語は現存勢力を擁護するものとこれを打破り取つて代らうとするものとの別を指す。經濟方面では有產者的勢力が右翼であり、無產者的勢力が左翼であり、政治方面では資本家・地主を擁護する政治的勢力が右翼であり、勞働者・農民に據る政治的勢力が左翼であることは言ふまでもない。これらの方向

を取る限りは、現存勢力が後退するほどに頑强であり、反對勢力が飛躍するほどに過激であらうとも、また烈しい對立抗爭が守るに將た攻めるに腕力を持出すことがあるとしても、それらによつて右翼と左翼とが入れ替はるとは考へられない。從つて階級解消を企圖する思想は、たとへ國體中心の立場に居るとしても、現存勢力に反對する以上は、他と混同を避ける爲に直ちに左翼とは言へないとしても、左翼色を帶びてゐることは明かである。然るに世人の中にてかゝる思想系統をも右翼と呼ぶものがあるが、何の故か解し難い。これを强いて解釋するならば、國體守護をも現存勢力の擁護の中に加へ、他に國體を否定するアナーキズム、マルキシズムなどを左翼と稱するに對し、國體守護者を右翼と見立てたのであらう。しかしこの見方は、我が國體もまた時代的制度たるに止まり、早晩變革さるべきものであり、それは當然に現存支配勢力と反對更替勢力との對立の中に加へらるべきものと見るとき、始めて許されることである。これと異り、必しも國體守護者でなくとも、善く日本國民歷史の主流を知つてゐるものは、日本の國體は本質的には建國以來何の變轉もなく、否な寧ろあらゆる國民生活相の秩序的變轉を可能ならしめる中軸であると認めてゐる。かゝる見解の下にては、我が國體は反對更替勢力と對立する時代的なる現存支配勢力とは見做されてゐない。虛中心の組織を持つ國民團體では中心が認め難いから、現象的に存在するものを擧げて右か左かに分類することも無理からぬことである。實中心を有する我國はその點が著しく異つてゐる。最近の議會にて治安維持法改正の議論があつたとき、頻りに右翼團體

の取締規定を加へるや否やの論爭が行はれたが、その右翼とは何を指すのであらうか。論理と歴史とに忠實であるならば、或はそれが當代の現存支配勢力を取締るものと早合點されるかも知れない。我が國の現時の思想問題はかゝる撞着を生ずるほど混雜してゐる。

六

現代の思想の流れは大體に於て國民主義の伸張にあると見てよい。それは多くの國民に就て謂へるが、殊に獨特の國體を有する我國に於て然う見られ得る。自由主義思想は全く氣勢を挫かれて、その言論は世間に殆ど何の反響をも生じない。新自由主義が起るとすれば、それは現代に問題となつてゐる更新國民主義が將來に於て完成し更に行詰つた場合に於てのみ想像され得る。しかしそれは遠き先きの子孫の問題である。有產階級思想は獨占資本的管制が進行するにつれて、次第に國家的統制と結付いて來たが、これも國民主義に追從しなければその依つて立つ所が危くなるであらう。無產階級思想は著しく變轉しつゝある。ロシヤが社會主義を採りながら、萬民主義から國民主義に轉向したことは、我國の國民主義の復活と相須つて、我國の共產主義者をも國民主義へ向はしめつゝある。しかしながら、有產階級思想は果して國民主義の前に己を空ふすることが出來得るであらうか。また無產階級思想が果して國民主義の前に釋然たる態度を執るに至るであらうか。思想問題は尙ほ暫らくの間は紛糾を續けなければなるまい。

然らば現代の思想問題の混亂は如何にして解決されるであらうか。吾人はこの解決が新たに建

てられるべき國民科學によつて行はれると思ふ。國民生活を導くものは國民生活に就て研究されたる思想體系でなければならぬ。從來の個人主義の科學も階級主義の科學も國民生活思想を混亂せしめた責任を負ふが、決して紛糾を解く資格を持たない。またその謂ゆる國民科學は決して「凡そ國民生活は」と言ふやうな概念的なものではなく、實在する所の一々の國民生活に就て、而かもその國民自身が觀察し思索したる智識體系でなければならぬ。我々にとつてはそれは日本國民科學であり、その他の如何なる科學も日本國民生活を導く任務を果たし得ない。かく言ふときは、或人は日本精神の威德を擧げ、他の人は科學の普遍的法則性を擧げて、この科學思想の價値を輕んじ又は疑ふであらう。しかし日本精神だけでは唯だ明治初年に返へるのみである。日本國民生活に限られた科學の科學性を怪むものは、未だ概念科學の惡夢が覺めないのである。

思想問題の混亂は學徒に對して深刻なる反省を强要して已まない。現今の思想問題の解決は、已成の對立思想の一方に與みすることでもなく、對立者への調停でも仲裁でもなく、また單純なる裁判でもない。それは今日の紛爭を批判すると同時に、更に明日の計を立てゝこれを實現し、以て思想の濁流を水上に於て淸め得る所の新しい思想的立法でなければならぬ。よしそれが如何に困難であるとしても、困難の故を以て正しい道から逃避してはならない。